様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３２６６５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ００６２３

研究課題名（和文）ヴァーチャル方言研究の展開

研究課題名（英文）Development of Virtual Dialect Research

研究代表者
田中　ゆかり（TANAKA, Yukari）

日本大学・文理学部・教授

研究者番号：４０３０５５０３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、言語社会を捉え直す新しい視点を提供するヴァーチャル方言研究のさらなる展開を目指し遂行された。本研究は、①ポピュラーカルチャーにおける仮想言語の実態と相互作用、②日本語社会構成員の方言と共通語に関する大規模意識調査の実施と分析の両面からアプローチした。併せてポピュラーカルチャー研究と言語研究の接点、日本語以外の言語社会との対照研究等の新たな研究課題の創出の手がかりも探った。研究期間を通じ、代表者・分担者・協力者は緊密に連携をとりつつ、調査・研究を進めた。成果は、著書をはじめとしたさまざまなかたちで公開した。一方、予定していた国際シンポジウムは、感染症拡大が収束せず、延期した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ヴァーチャル方言は、現実の生活のことばとしてのリアル方言に何等かの水準で編集・加工が施されたいわば「創られた方言」である。従来は、大衆的コンテンツの要素、あるいは単なる流行や遊びとして社会的に注目されることはあったとしても、消費される一方で、ヴァーチャル方言を言語研究の対象とする価値はほとんど認められてこなかった。本研究課題の成果は、ヴァーチャル方言が当該言語社会の写し鏡であることを明確に示した。同時に、言語研究と文化研究の接続、異なる言語社会間の対照研究の素材となることも示せたのではないだろうか。身近な素材から所属する言語社会を顧みる楽しさを社会に伝えることもできたのではないかと考えている。

研究成果の概要（英文）：This study was conducted with the aim of advancing virtual dialect research, which offers new perspectives on linguistic society. This research was approached from two perspectives: (1) the actual situation and interaction of virtual languages in popular culture, and (2) the implementation and analysis of a large-scale survey on the attitudes of members of Japanese society toward dialects and common language. We also proposed new research topics such as the interdisciplinary combination of popular culture and linguistic studies, as well as contrastive studies with non-Japanese linguistic communities. Throughout the project, the members of this research group worked closely together to conduct research and surveys. The results were published in various forms, including an edited volume. On the other hand, an international symposium was scheduled to share the results of this project, but was postponed due to COVID-19 restrictions

研究分野：日本語学

キーワード：ヴァーチャル方言　方言コンテンツ　全国方言意識調査　ポピュラーカルチャー　役割語

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日本語社会における方言の価値と位置づけについては、言語政策ならびに教育という国家の施策の変遷やマスメディアの発達と関連付け、いくつかの段階を経て、今日の状況に至ったという「大きな流れ」を模式的に示す研究が主たるものであった。同時に、代表都市調査における言語意識調査結果や、地域方言に関連したコンテンツ類を事例的に示しながら模式的な「大きな流れ」と関連付ける研究なども盛んに行われてきた。一方、研究分担者である金水敏の提唱する「役割語」研究が、言語社会における言語ステレオタイプを捉える研究的枠組みとして有効であるとの共通理解が定着した時期でもあった。また、代表者が地域方言研究の文脈において、生活のことばとしてのリアル方言を資源とした「ヴァーチャル方言」という枠組に基づく萌芽的研究を展開しつつある時期でもあった。

２．研究の目的

本研究は、言語社会を捉え直す新しい視点を提供するヴァーチャル方言研究のさらなる展開を目指すことを目的とした。ヴァーチャル方言とは、リアルな素の方言に何らかの水準で編集・加工が施された仮想言語のことである。ポピュラーカルチャーにおいて再提示されるヴァーチャル方言は、当該言語社会における言語意識を色濃く反映する。そのようなヴァーチャル方言の実態や成立背景・変遷をたどることにより、当該言語社会のありようとその変化を捉えることが可能となる。本研究では、①ポピュラーカルチャーにおける実態と相互作用、②言語社会構成員の言語行動と言語意識の探索の両面から、ヴァーチャル方言研究の深化と展開を目指した。

３．研究の方法

本研究では、(1)ポピュラーカルチャーにおける実態とコンテンツ間の相互作用、(2)日本語社会構成員の言語行動と言語意識の探索の両面から、ヴァーチャル方言研究の深化と展開を目指した。

(1)については、分野を超えた潜在的・顕在的メディアミックス―話芸、古典芸能と近代期以降のポピュラーカルチャーなどの分野をまたいだ相互作用―や、リメイク作品などに注目した調査・分析を行った。

(2)については、日本語社会の構成員を対象とした大規模な言語意識調査を実施した。方言と共通語についての意識や、方言ステレオタイプ、方言ステレオタイプ形成に関与した各種コンテンツについての意識調査を行った。

(1)言語社会の意識を映す大衆的コンテンツと、(2)言語社会の構成員の意識の年代差・地域差とを連関させながら、相互の解釈を深める方法で研究課題の解明にあたった。

４．研究成果

研究成果については、本研究課題に基づく主要な成果に絞り、研究代表者、同分担者の順に示す。

(1)田中ゆかり

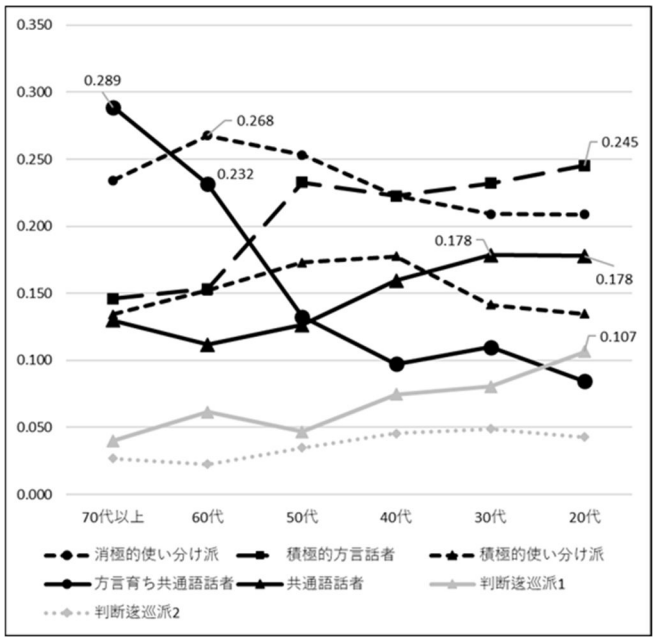
①『読み解き！方言キャラ』（田中ゆかり 2021、研究社）

本研究期間中の調査・分析を含む研究期間中の Web 連載に基づく代表者による単著である。ポピュラーカルチャーにおいてヴァーチャル方言を付与されたキャラクターを「方言キャラ」と定義し、それらの台詞を中心に分析した。このことを通じ、日本語社会のポピュラーカルチャーにおいて「方言キャラ」が成立する背景や、付与される台詞の時代・媒体による異なりなどを通じ、日本語社会における方言の価値と位置づけを明らかにした。新語・流行語大賞、時代劇・歴史もの（小説、演劇、映画、テレビドラマ、マンガ等）、商業演劇、江戸落語、ラップ、バラエティーテレビ番組、マンガ、ご当地キャラなど多様なポピュラーカルチャーにその素材を求めた。

②「1 万人を対象とした全国方言意識 Web 調査に基づく話者類型」（田中ゆかり・前田 忠彦・林直樹・相澤正夫 2022、『計量国語学』33(4)）

全国に居住する一万人を対象とした大規模な方言意識調査データに基づく話者類型を抽出し、話者類型の地域差・年代差から日本語社会における方言意識の変遷を明らかにした。2020 年度日本語学会秋季大会における同じメンバーによる招待発表（ポスター発表）を進化させた査読誌掲載論文である。代表者・分担者・協力者による共同研究成果である。全国の 20 歳以上の男女約１万人から回答を得た 2015 年全国方言意識 Web 調査のデータを用い、潜在クラス分析によって話者類型を抽出し、各類型の特徴記述とその解釈を試みた。「消極的使い分け派」「積極的方言話者」「積極的使い分け派」「方言育ち共通語話者」「共通語話者」「判断逡巡派 1」「判断逡巡派 2」の 7 つの類型が抽出された。帰属確率平均値に着目すると、クラスサイズの大きな主要５類型には、明らかな地域と年代の効果が認められた。地域の効果は現代日本語社会における方言と共通語に対する意識の地域差、年代の効果は戦後日本語社会を構成する話者の意識が、「方言育ち共通語話者」から「共通語話者」「積極的方言話者」へと変遷したことを映すものと解釈した

（下図参照）。



③「映像メディアにおける方言活用」（田中ゆかり 2020、半沢康・新井小枝子編『実践方言学講座』、くろしお出版）
NHK 大河ドラマに登場するキャラクターの台詞に注目し、現代劇に比して時代劇には地理的差異を示すヴァーチャル方言が付与されることが少ない一方、ヴァーチャル方言が付与されやすい属性や特定のキャラクターが存在することや、その理由を明らかにした。

④「方言とポップカルチャー」（田中ゆかり 2021、『日本語学』40(1)、明治書院）
2010 年代中頃より商業マンガとして成立した「方言萌えマンガ」を定義し、その構造とヴァーチャル方言との関係性を明らかにし、その派生形を取り上げながら、「方言萌え」のあり方も時代に従い変化していることを明らかにした。

⑤「第五章 方言の未来と進化」（田中ゆかり 2020、山形県生涯学習文化財団『どっこい方言は生きている』）
日本語社会における方言の価値の変遷について述べながら、方言ラッパーとして山形県を中心に活躍するタレントのミッチーチェン氏の活動を通し、地域と結びつくラップ成立の由来と歴史を接続させることによって、ラップと方言の相性がよいことを明らかにした。

⑥『時代劇・歴史ドラマは台詞で決まる！』（田中ゆかり・金水敏・児玉竜一編、吉川 邦夫・大森洋平共著・林直樹編集協力 2018、笠間書院）
NHK 大河ドラマをはじめとした時代劇・歴史ドラマの仮想言語についてのシンポジウムに基づくブックレット。代表者はヴァーチャル方言研究の観点から、分担者は役割語研究の観点から、協力者はテレビドラマの制作の観点からそれぞれ具体例を示しながら論じた。ブックレット化に際しては、根拠を明確にするためのデータおよび注記の大幅な増補を行った。時代劇・歴史ドラマにおいては、現代劇に比べ「時代語」という仮想言語をベースとするため、地理的変異である地域方言に基づくヴァーチャル方言は現れにくい一方、特定の属性やキャラクターとの結びつきがあることが明確になった。

⑦「方言コスプレ」と「ヴァーチャル方言：用語・概念・課題」（田中ゆかり 2018、『方言の研究』4）
ヴァーチャル方言研究の枠組みについて、隣接領域の役割語やキャラ助詞・キャラコピュラなどとの関係性などを整理した。仮想言語研究において独立に用いられてきた術語とその定義を整理した。

(2)金水敏
①「役割語における感動詞」（金水敏 2022、友定賢治（編）『感動詞研究の展開』、 ひつじ書房）
宮崎駿監督作品を中心とするジブリアニメのデータにおけるヴァーチャル方言の使用について調査を行い、それらの作品では方言的要素がかなり抑制されていることを確認した。

②「村上春樹と関西方言について―遠心的／求心的な移動とポリフォニー―」（金水敏 2020、中村三春（監修）・曽秋桂（編集）『村上春樹における移動』pp. 23-40, 淡江大学出版中心）
村上春樹の小説作品を調査した。村上春樹自身は関西方言話者であったにも関わらず、関西方言的な表現は作品にはさほど目立たないように見える。しかし 1995 年を画期として徐々に彼の作品に関西方言が見られるようになり、その用法は単純な「地域用法」「キャラ用法」と見えるものもある一方で、どちらとも決めがたい、作者自身の経歴と深く関わるとみられる用法があることを示した。

③「村上春樹作品と日本語史の共鳴-『騎士団長殺し』騎士団長の「あらない」再考-」（金水　敏 2019、中村三春（監修）・曽秋桂（編集）『村上春樹における共鳴』、淡江大学出版中心）
村上春樹の長編小説を中心に、方言要素をどのように活用しあるいは抑制するかという観点からデータを収集・整理し、論文執筆や講演等を行った。例えば『騎士団長殺し』に登場する「騎士団長」は「そうではあらない」のような特徴的な語法を用いるが、この語法が西日本方言的特徴と東日本方言的特徴を合わせ持つものであり、文献に実例があるものの、『騎士団長殺し』の場合は極めて人工的な操作により生み出された語法であるという可能性を述べた。

④「関西人のコミュニケーションのイメージと実態」（金水敏 2018、プロジェクトマネジメント学会・関西支部・平成 30 年度春季シンポジウム）
関西方言や関西人のコミュニケーション行動について書籍や SNS 等でよく話題にされる「知らんけど」やオノマトペの多用等について資料を収集し、学会講演等を行った。

(3)林直樹
①「多人数質問調査法の現在（7）―ネット調査の利点と制約―」（林直樹・田中ゆかり 2020、『計量国語学』32(4)）
ヴァーチャル方言研究において取り入れられているネット調査にかんする方法論の検討を行った。日本語学･言語学分野におけるネット調査の方法論について現在まで行われた事例を収集し、その利点と制約をまとめた。

②「話芸・映像メディアを中心とした社会・文化・言語ステレオタイプの多角的研究」（田中ゆかり・古川隆久・佐藤至子・林直樹・閑田朋子・岡隆 2019、『日本大学文理学部人文科学研究所研究紀要』97）
「江戸・東京 WebGIS（https://dep.chs.nihon-u.ac.jp/japanese_lang/nichigo-nichibun/web-edo-tokyo/）」に落語資料を追加し、このデータを使用して江戸・東京圏において落語に現れる地名・舞台の分布傾向を分析したところ、落語資料で表象されやすい江戸・東京の土地は台東区周辺であることがわかり、創作物における土地イメージの作られ方の一端を明らかにした。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計18件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 田中ゆかり・前田忠彦・林直樹・相澤正夫	４．巻 33(4)
２．論文標題 1万人を対象とした全国方言意識Web調査に基づく話者類型	５．発行年 2022年
３．雑誌名 計量国語学	６．最初と最後の頁 249-264
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 金水敏	４．巻 1
２．論文標題 役割語における感動詞	５．発行年 2022年
３．雑誌名 友定賢治（編）『感動詞研究の展開』	６．最初と最後の頁 287-305
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 田中ゆかり	４．巻 40(4)
２．論文標題 社会と心に向かう言葉学⑥ 社会を映す鏡としてのヴァーチャル方言	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本語学	６．最初と最後の頁 122-123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 二階堂整・田中ゆかり・西尾純二・灰谷謙二・半沢康	４．巻 7
２．論文標題 資料・情報　方言研究支援プロジェクトを振り返る	５．発行年 2021年
３．雑誌名 方言の研究	６．最初と最後の頁 29-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中ゆかり・林直樹	4．巻 170
2．論文標題 「打ちことば」コミュニケーションにおける絵文字使用―「加藤安彦ケータイメイルコーパス」を用いた分析―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 語文	6．最初と最後の頁 124-111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中ゆかり	4．巻 40(2)
2．論文標題 社会言語学から見た「国語に関する世論調査―調査データの用途と活用の観点から―」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 日本語学	6．最初と最後の頁 16-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中ゆかり	4．巻 40(1)
2．論文標題 方言とポップカルチャー―「方言萌えマンガ」から探る両者の関係―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 日本語学	6．最初と最後の頁 70-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 金水敏	4．巻 1
2．論文標題 村上春樹と関西方言について―遠心的／求心的な移動とポリフォニー―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 中村三春（監修）・曽秋桂（編集）『村上春樹における移動』	6．最初と最後の頁 23-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 田中ゆかり	4．巻 1
2．論文標題 映像メディアにおける方言活用	5．発行年 2020年
3．雑誌名 半沢康・新井小枝子編『実践方言学講座1　社会の活性化と方言』	6．最初と最後の頁 95-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中ゆかり	4．巻 393
2．論文標題 方言活用は「多様性学び他者を知ること」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日経グローカル	6．最初と最後の頁 15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 林直樹・田中ゆかり	4．巻 32(4)
2．論文標題 解説　多人数質問調査法の現在（7）―ネット調査の利点と制約―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 計量国語学	6．最初と最後の頁 234-238
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24701/mathling.32.4_234	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 金水敏	4．巻 1
2．論文標題 村上春樹作品と日本語史の共鳴―『騎士団長殺し』騎士団長の「あらない」再考―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 中村三春（監修）・曽秋桂（編集）『村上春樹における共鳴』	6．最初と最後の頁 29-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中ゆかり	4．巻 38(8)
2．論文標題 「ことば」と社会のゼミナール―初年度教育から「テーマは自由！」のゼミ論・卒論まで―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本語学	6．最初と最後の頁 34-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中ゆかり	4．巻 1492
2．論文標題 日本語社会を映す方言の変遷	5．発行年 2019年
3．雑誌名 図書館教育ニュース	6．最初と最後の頁 1
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中ゆかり	4．巻 38(1)
2．論文標題 情報化時代の言語コミュニケーション―媒体・手段の特性と年代差―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本語学	6．最初と最後の頁 22-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中ゆかり・古川隆久・佐藤至子・林直樹・関田朋子・岡隆	4．巻 97
2．論文標題 話芸・映像メディアを中心とした社会・文化・言語ステレオタイプの多角的研究	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本大学文理学部人文科学研究所 研究紀要	6．最初と最後の頁 235-255
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中ゆかり	4．巻 4
2．論文標題 「方言コスプレ」と「ヴァーチャル方言」：用語・概念・課題	5．発行年 2018年
3．雑誌名 方言の研究	6．最初と最後の頁 71-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中ゆかり	4．巻 2018年5月25日版
2．論文標題 論点　「そだねー」方言萌えの時代	5．発行年 2018年
3．雑誌名 読売新聞	6．最初と最後の頁 12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　8件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 田中ゆかり
2．発表標題 「方言」で読み解く戦後日本語社会
3．学会等名 社会言語科学会第46回研究大会（招待講演）
4．発表年 2022年

1．発表者名 田中ゆかり
2．発表標題 方言萌えの時代―「方言」の価値の変遷をたどる―
3．学会等名 沼津市民大学（招待講演）
4．発表年 2021年

１．発表者名 田中ゆかり
２．発表標題 ウィズコロナでも持続可能な「方言研究」
３．学会等名 韓国日本研究総連合会　第9回國際學術大會「ポストコロナ時代の日本研究の展望」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 田中ゆかり・前田忠彦・林直樹・相澤正夫
２．発表標題 1万人を対象とした全国方言意識Web調査に基づく話者類型の抽出 ―「方言育ち共通語話者」の地域差・年代差を中心に―
３．学会等名 日本語学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 田中ゆかり
２．発表標題 高度経済成長期の言語観を映す松本清張『砂の器』
３．学会等名 Matsumoto Seicho Media, Adaptation, and Middlebrow Literature（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 田中ゆかり
２．発表標題 「方言コスプレ」とその社会的背景
３．学会等名 清華大学創立108周年記念行事（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 田中ゆかり
２．発表標題 “「方言萌え」の時代”に至るまで：「方言」の価値の変遷をたどる
３．学会等名 日比谷カレッジ（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 田中ゆかり
２．発表標題 方言の未来と進化
３．学会等名 平成30年度「山形学」どっこい方言は生きている講座第5回（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 田中ゆかり
２．発表標題 方言ヒーロー／ヒロインは幕末に咲く！
３．学会等名 シンポジウム「時代劇・歴史ドラマは台詞で決まる！　世界観を形づくる「ヴァーチャル時代語」
４．発表年 2018年

１．発表者名 金水敏
２．発表標題 関西人のコミュニケーションのイメージと実態
３．学会等名 プロジェクトマネジメント学会・関西支部・平成30年度春季シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計3件

1．著者名 田中ゆかり	4．発行年 2021年
2．出版社 研究社	5．総ページ数 283
3．書名 読み解き！方言キャラ	

1．著者名 山形県生涯学習文化財団	4．発行年 2020年
2．出版社 山形県生涯学習文化財団	5．総ページ数 290
3．書名 遊学館ブックス どっこい方言は生きている	

1．著者名 田中ゆかり（共編著者：金水敏、児玉竜一、共著者：吉川邦夫、大森洋平）	4．発行年 2018年
2．出版社 笠間書院	5．総ページ数 135
3．書名 時代劇・歴史ドラマは台詞で決まる！―世界観を形づくる「ヴァーチャル時代語」―	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	金水　敏 (KINSUI Satoshi) (70153260)	大阪大学・文学研究科・教授 (14401)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	林　直樹 (HAYASHI Naoki) (70707869)	日本大学・経済学部・講師 (32665)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	吉川　邦夫 (YOSHIKAWA Kunio)		
研究協力者	大森　洋平 (OOMORI Yohei)		
研究協力者	エメリック　マイケル (EMMERICH Michael)		
研究協力者	前田　忠彦 (MAEDA Tadahiko)		
研究協力者	相澤　正夫 (AIZAWA Masao)		
研究協力者	古川　隆久 (HURUKAWA Takahisa) (70253028)		

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	佐藤　至子 (SATO Yukiko) (70329639)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関